白鷺と嘘発見器

久安　元

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白鷺と嘘発見器

【Ｎコード】
Ｎ５７５２Ｚ

【作者名】
久安　元

【あらすじ】
他人の嘘がわかる少年が一人の少女と出会い、何を感じ、どう変わっていくのかを描いた物語。

他サイトにも投稿しています。

嘘発見器、少女と出会う

何の変哲もない、どこにでもあるような高校の屋上に一人の少女が佇んでいた。

天気は最悪。朝方は曇り空だったが昼から強い雨が降り出している。しかし少女は気にすることもなく、その身を雨に晒していた。

既にその身体に濡れていないところはなく服も髪も少女の身体にくっついていたが、少女はそれを不快に感じてはいないようで、むしろ楽しそうに口笛を口ずさんでいた。

「ちゃんと来てくれるかな？」

少女は誰に伝えるでもなく言葉を紡ぎながら、空を見上げる。

空は相変わらずねずみ色の雲に覆われ、温かな青色を見ることはできない。

少女が佇む屋上にはその身を守るような屋根はなく、雨は容赦なく少女の身体を冷やしていく。

しかし、彼女の心は熱を帯びたままだ。初めて自分の目で世界というものを見た興奮は少女の心を熱していく。そしてこの後出会うことになるであろう少年に対する興味が少女の鼓動を速めていく。

早く、早く――。

速まる鼓動とは違い、決して早めることのできない時間をもどかしく思いながら少女は屋上で一人待ち続ける。

突然だが、君たちはラブレターなるものをご存じだろうか？

そう、選ばれた者のみが手に入れることのできる人生の勝ち組への招待状のことだ。現在では最早ブルマーやセーラー服などと同じく絶滅危惧種に指定されたとしてもおかしくはない種族である。

大半の男子高校生がそうであるように、これまでこの俺、天原頼人（あまはらよりと）もその例に洩れず誰かからラブレターを貰ったことはなく華のな

い灰色の高校生活を送ってきたのだが、どうやらその寂しい生活も今日で終わりのようだ。
　というのも俺の下駄箱の中、上靴の上に白い封筒が置いてあったのである。
　静かに、しかし力強く勝利の余韻に浸っていると後ろから聞き慣れた声が聞こえてきた。
「よう、頼人。下駄箱の前でガッツポーズするなんていつも以上に気持ち悪いな。一体どうしたんだよ？」
　後ろを振り返ると同じクラスの桐村龍平（きりむらりゅうへい）が若干呆れたような顔で立っていた。
「おう、龍平。気持ち悪いとは心外だな。俺と同じ立場だったらお前も平静じゃいられないはずだぞ？」
　俺が勝ち誇った顔をすると、龍平は何かを悟ったような顔をして徐々に焦りだした。
「まさか、お前……！」
「そのまさかだ。見ろ、この勝者の証を！」
　俺は下駄箱から封筒を取り出し、あたかも水戸の老人が持つ印籠のように龍平に見せつける。
「……」
　おかしい。龍平の反応が薄い。悔しがるどころか、何やら憐憫の目で俺を見ている。
「頼人。その封筒をよーく見てみろ」
　微妙に黒く汚れている白い封筒だ。そしてその口はセロハンテープで乱雑にとめてある。差出人の名前はない。
　ほらな？　どこにもおかしい所はない。
「おいおい、何かおかしい所でもあるのか？　どこからどう見てもラブレターだろう？」
「そんな風化したラブレターなんてねえよ！　どっちかっていえば果たし状じゃねえか！」
「馬鹿野郎！　出してくれた女の子の家が貧乏でこれしか用意でき

なかったのかもしれないだろうが！」
「何、その気持ち悪いポジティブ思考！？」
ああ、もうコイツは！　と頭を抱えてうずくまる龍平だったが、突如すっくと立ち上がり俺の目を見て提案してきた。
「はあ……。じゃあ、いっそ確認してみようぜ。そうした方がお互いスッキリするだろ？」
俺宛てのラブレターを他の奴と見るのは出してくれた女の子に失礼だとは思ったが、龍平なら誰かに内容を言いふらすということもないだろう。
「わかったよ。ならさっさと教室にカバン置いてトイレにでも行くとするか」
そう提案するや否やすぐさま歩きだす。
二階にある自分たちの教室に行き、カバンをそれぞれの机の上に置く。そしてカバンの中身を机の中に押し込んだ後、さっさと教室を出て近場の男子トイレへと向かう。
俺も龍平もどちらかといえば早めに登校する傾向にあるが、今日の一般生徒はそうでもないようだ。おかげで教室で誰かに声をかけられて時間をロスするということもなかった。
「それにしても、厄介なモン貰ったよな、お前」
突然、龍平が心底そう思っているような口調で言う。
「んー、そうか？」
「そうだよ。ラブレターならともかく果たし状だったら最悪だろうが。待ってるのは可憐な女子学生じゃなく、汗臭い男子学生だぞ？」
しかもガチムチ系の、と余計な単語まで付け足してくる。
「大丈夫だって。……それに最悪なのは果たし状の場合じゃないしな」
「あん？　どういう意味だ？」
龍平が眉に皺を刻んで問いかける。
仕方ない。コイツに真の恐怖というものを教えてやろう。
「最悪なのはこれがラブレターで、屋上で待ってるのが汗臭い男子

学生だった場合だろ？　……ガチムチ系の」
俺の言っている意味が理解できたのか龍平の顔が真っ青になる。
「……ヤベ、想像したら吐きそうになってきた……」
「あと少しでトイレだからそこまで我慢しろ」
そんな馬鹿な会話を交わしている間に俺たちの教室から最も近い二階の男子トイレに到着した。中に誰もいないことを確認した後、一番遠い位置にある個室に入る。
「さて、運命の時間だ……」
いつ人が入ってくるかわからないので声を抑えて話しかける。
「お前が最初に読めよ。お前が貰ったんだから」
「もちろんだ。では……」
封をしているセロハンテープを慎重にはがし、中に入っている一枚の紙を取り出す。
正直ドキドキしてきた。さっきは龍平の前なので強がってみせたが、本当に果たし状、もしくはガチムチ男子学生からのお誘いの類だったら絶望しかない。
そんな最悪な未来のビジョンを頭から振り払い、意を決して手紙に目を落とす。
そうして俺が目にしたのは――。
「……、どうだった？」
恐る恐るといった感じで龍平が確認してくるので、俺は黙って手紙を龍平に差し出す。
「おい、これって……」
手紙に目を通した龍平が俺の顔を見、そして今度は二人で手紙を見る。
そこに書いてあったのは
『放課後、屋上で待っています』
という可愛らしい文字。

想像していたような内容でこそなかったものの、これはどこからどう見ても女の子からのラブレターであった。
声にならない声をあげる俺。
そして、信じられないという顔をしていたが、次第に苦笑をもらす龍平。
「ま、おめでとうと言っとくか」
「おう！　ありがとう！」
がしっと龍平の手を握り笑顔で答える。
「気持ち悪っ！」
龍平がその手を瞬時に振りほどく。そうして少しおどけた感じで
「でも頼人、用心しておけよ？」
と言ってきた。
「用心？　確かに女の子っぽい字を書くガチムチ系男子である可能性はまだ否定できねえけど……」
「俺が言いだしたことだけど、そろそろガチムチから離れねえ！？」
うん。俺もそろそろ止め時かなとは思ってた。
「それで何に用心するんだ？」
「最近この辺り何かと物騒だろ？　失踪事件だとか何とかで」
この豊泉高校の近辺ではここ一週間で八人もの人間が行方不明となっている。警察が血眼になって失踪した人間の捜索にあたっているが一人も発見には至っていない。
「結果がどうあれ、帰り道は用心しろよって話だ」
「ああ、そうする。……そろそろホームルームの時間だな」
腕時計で時間を確認してタイムリミットが近づいていることに気づいた俺はトイレの個室のドアを開けて外に出る。すると再び龍平が口を開いた。
「そうだ！　聞いてくれよ、頼人。こないだ学校の帰りに怪しいおっさんから古書をたくさん貰ってさ！」
「お前が気をつけろよ！　結構危ない感じの話だからな、それ！？」
俺に忠告した本人がこれかよ！

「いや、俺もただの古書なら受け取らなかったんだけど、それがまたこの辺りの伝承やら神話やらが書かれたレアモノでな？　つい貰っちゃったんだよ。それでその内容なんだけど――っておい、どこ行くんだよ！！」
　龍平が内容について話し出した瞬間、俺は脱兎のごとく走り出していた。
　こういった話の収集を趣味としている龍平に付き合っていたらホームルームが始まってしまうからだ。ちなみに以前その話を聞いてやったときは休みが一日消えた。
「いいから走れ！　朝っぱらから怒られるのなんて俺は御免だ！」
「ちょっと待てって！　ああ、くそ！　後で絶対聞いてもらうからな！」
　龍平のそんな叫びを聞きながら、俺は教室へと足を速めるのだった。

「頼人ー、ラブレター貰ったってホント！？」
　昼休み。いつものように食後の娯楽としてトランプをしているとき、白波瀬美咲（しらはせみさき）がいままさにカードを切ろうとしていたその手を止めてデカイ声で聞いてきた。
（ちなみにプレイ中のゲームはダウト。1から13までのカードを裏向きにして順番に出していくゲームである。
　しかし、プレイヤーは自分の番に対応した数字を必ず出さなければならないわけではなく、異なった数字を出しても構わない。
　だが異なった数字を出した際に「ダウト」とコールされた場合、これまで出したカードを全て引き取らなければならず、逆に正しい数字が出されたときに「ダウト」とコールした場合はコールしたプレイヤーがこれまで出したカードを引き取らなければならない。
　それを繰り返し最初に手札をなくしたものが勝者となる）
「……。本当だけど、それを話したのはお前か？　龍平？」

ジトッとした目を向けると龍平は少しバツが悪そうにしながらも「そんな目で見るなよ。美咲をのけものにすると後が怖いのはお前も知ってるだろ？　それに下駄箱の辺りであんだけ騒いでたんだ。きっと他の奴にもバレてるぜ？　ほい『8』」と、言いながらカードを切る。

それは確かにそうかもしれないが……。

俺はともかく相手は良い気分はしないだろうから、放課後に会ったときにちゃんと謝っておこう。

「それはそうと龍平。それダウトだ」

「げ」

龍平が捨てたカードを裏返すと出てきたのは「スペードの3」。いま捨てなければならない数字は「8」なので俺のコールは成功である。

「……お前この手のゲーム反則的に強いよな。俺も弱いわけじゃないと思うんだけど」

納得がいかないといった様子で首を傾げる龍平。確かに本人の言う通りどちらかといえば、コイツの表情は読みにくくて仕方がない部類に入る。

では何故、俺は自信を持ってコールすることができたのか？

答えは簡単。俺は龍平がカードを捨てる瞬間に龍平の「嘘」を感じたからだ。

嘘を感じるといっても心が読めるというわけではなく、単純に人が発した言葉や、行動に嘘があるかないかがわかるだけなので、こういったトランプなどで遊んでいてもいつも勝てるわけでもない。

ちなみに、このよくわからない力とは物心ついた頃に自覚してからずっと付き合ってきたのでもう十年以上の付き合いになる。

嘘がわかる、といえばとても便利に思う人もいるかもしれない。

まあ、実際嘘を見抜けるということで得をしたこともあった。

例えば友達を選ぶことができた。

平気な顔して何度も嘘をついて約束をすっぽかすヤツ、嘘をつい

て人が騙されたのを見てヘラヘラしてるようなヤツとは付き合わないようにしてきた。
だから俺が本当に友達と呼べる人間は少なく、このクラスでは龍平と美咲ぐらいなものだ。この二人との付き合いは高校に入ってからだが、俺の前で嘘をついたことがない。（もちろんさっきのようなゲームはともかくとして）
嘘をつかないという得難い友人を見つけることができたという利点もあるが、この力は良いことばかりを運んできてくれるわけではない。
本当に……、良いことばかりを運んできてくれるだけならどれだけ良かったことか。
「頼人、頼人、トランプ曲がっちゃうよ？」
「ああ、悪い」
思わず手に力が入ってしまったようだ。意識を再びゲームへ向ける。
過ぎてしまったことはもうどうでもいい。いまはこの楽しい時間を享受するとしよう。

放課後になった瞬間、俺は屋上へと走り出していた。龍平も美咲も手紙のことを知っているのでニヤニヤしながら見送ってくれた。
教室を飛び出した後も一切スピードを緩めることなく走る。
二段飛ばしに階段を駆け上り、四階へ到達。乱れた呼吸を整えることなく立ち入り禁止のロープをくぐり、屋上に通じるドアの前に到着する。そして、ラブレターをくれた相手が男でないことを祈りながらドアを開け放つ。

目の前に広がるモノはいつもの屋上、昼から降り続く雨、そして一人の少女だった。
少女の髪は腰に届くほど長く、雪のように白い。そして彼女が身

につけているのは豊泉高校の制服ではなく、膝下まである黒いワンピース。その黒いワンピースから伸びたスラリと長い手足に、背中から伸びた青白く光るコードがそれぞれ一本ずつ巻きついていた。
ん？　コード？
予想していた状況とかなり異なる光景に唖然としていた俺に気がついたのか、少女がぱっと振り向く。
振り向いたことで少女の顔がはっきりと俺の眼前に晒されたわけなんだが……。何というか、その、反則なくらい可愛い。
金色に輝く目や、鼻、口といったそれぞれのパーツの美しさが抜きん出ているだけでなく、パーツ同士が互いに調和し合っている。俺の胸に届くか届かないかぐらいの小さな身体と相まって彼女は人形――そう、まるで完成された人形のようだった。
「やっと来てくれた。もう、待ちくたびれちゃったよ」
少女は不満そうにしながらもどこか嬉しそうである。
少女を無視するわけにもいかないので、突然の美少女襲来によって茹だった頭を雨を利用して急速冷却し少女の言葉に応える。
「ごめん、遅れちゃったかな？　これでも急いだつもりだったんだけど」
放課後になってからまだ数分しか経っていないはずなんだが……。この娘は一体いつからここで待ってたんだ？
そう疑問に思っていると少女が再び口を開く。
「いいよ。許してあげる。喧嘩するために呼び出したわけじゃないし。ね？　頼人？」
呼び出したんだから俺の名前は知っているのだろうとは思っていたが、正直俺はこの少女に面識はない。他の人間だったら忘れただけということも考えられるが、この少女に限ってそれはないだろう。
ニコッと柔らかく笑いかけてくれる少女の態度に安堵しつつ、俺は本題に入らせてもらうことにした。
「それで、えーと……、見たとこウチの生徒でもなさそうだけど、何か用かな？」

「うん。頼人にとても大事な用事があって呼びださせてもらったの」
大事な用事！　大事な用事！！
こう言われて期待しない男子はいないだろう。喜びが顔に出るのも格好悪いと思ったので上を向いて表情を見られないようにする。
にやけた顔が元に戻ったことを確認し、俺は再び彼女に目を向ける。
すると少女はこれまでの笑顔が嘘であったように真剣な顔をしていた。
そして
「私と一緒に世界を守ってくれる？」
と、声を絞り出すようにして自らの願いを口にした。
普通この言葉だけを聞けば冗談にしか聞こえない。
目の前に立つこの小柄な少女が如何に真剣な表情を、泣き出しそうな表情をしていても、やはり信じることはないだろう。
でも。
俺には彼女がどれだけ真剣にそれを頼んでいるのかがわかる。
だって。
俺は人が嘘をついているかどうかわかるんだから。
だから俺も真剣に彼女に応えなければならない。
彼女は嘘が溢れるこの世界で、本当の想いを抱えて俺に向き合ってくれる数少ない人なんだから。
俺はしっかりと彼女の眼を見つめ出来るだけ力強く聞こえるようにこう答えた。
「任せろ」
こちらが承諾したことに余程びっくりしたのか目の前の少女は目を丸くしている。
俺はその様子がとてもおかしくて苦笑しながら尋ねた。
「何びっくりしてるんだよ？　受け入れられたのがそんなに意外だった？」
「えっ？　うん、いや、そうじゃなくて！　だってこんなことお願

いしたら普通『何コイツ気持ち悪い』とか『頭大丈夫かこの女』みたいに言われると思ってたから……」
「あー、まあ普通はそうだな。それが普通の対応だ」
だって『世界を守って』だぞ？　俺も普通の人間だったらそうしていたであろう自信はある。
「でも君が言ったことは嘘じゃないし、本当のことなんだろ？　なら手伝ってやるさ」
視線をグラウンドの方に逸らして、あくまで仕方ないという雰囲気を装う。俺にだって口に出して恥ずかしいこととそうでないことぐらいはわかっているつもりだ。
反応が何もないので視線をグラウンドから少女に戻すと、まだ目を丸くしながら俺を見つめていた。
あの、お嬢さん？　さっきの台詞と相まってすごく恥ずかしいので何かアクションを起こしていただけないでしょうか？
そんな風に思っていると少女はやっと正気に戻ったようで頭を左右にフルフルと振った後、再び俺を見て
「ありが…、くしゅん」
と可愛らしいくしゃみを披露した。
そりゃ、びしょ濡れだもんなあ。俺もこの数分のやり取りで濡れてしまっているが彼女程ではない。
彼女を見ると茹でダコのようになっていた。肌が白いから余計に赤いのが目立つ。お礼の途中でくしゃみをしてしまったのがよっぽど恥ずかしかったのだろう。
先程より強く頭を左右に振り顔の火照りを冷まそうとしている。
そして今度こそ
「ありがとう、頼人」
とこっちが真っ赤になるような笑顔で告げた。
「お礼を言うのは世界を救ってからだろ？　えーと」
そういえば俺がまだ彼女の名前を知らないことに気がついた。
「まだ名前を聞いてなかったね。何て名前なんだ？」

そう聞くと少女はキョトンとした顔をする。
……何か変なこと聞いたか、俺？
「私に名前なんてないよ？」
「は？」
「だから私に名前なんてないんだってば」
少女は衝撃の事実を当たり前のように言う。
マジだ……。マジで言ってやがる……！
「じゃあ、何て呼べばいいんだ？　名前がないと何かと不便だろ？」
「うーん、どうしても名前って要る？」
「間違いなく要る」
とんでもない問いに即答する。
「……じゃあ『イア』でどう？」
「『イア』？　また変わった名前だな。っと悪い」
たとえ本当の名前じゃなくとも人の名前を馬鹿にするものじゃない。
「気にしなくていいよ。自分で言うのもどうかと思うけど、私も変わった名前だと思うし。それにここに彫ってあっただけだから」
そう言って笑顔で左腕に巻きついていたコードをこちらによこしてくる。
それを受け取り、コードの先端部分に彫られている文字を見た。
『■■■■■■I■　■■■■■■A■』
「I」と「A」は辛うじて読むことができるが、他の文字は削られていて全く読むことができない。
だが名前の由来だけは理解できた。
「読めるところをくっつけて『イア』ってことか」
「そういうこと。だからこれからはイアって呼んでね」
単純だがそれ以外に読みようもないので仕方がない。
「ああ、改めてよろしくな、イア」
「うん！　よろしくね頼っ、……くしゅん」
……何というか決めるところで決められないタイプの娘だ。

「とりあえず、話は着替えてからだな」
苦笑しながら言う。
そして、それから。
一緒に世界を救いに行くとしますか。
無意識に空を見上げるといつの間にか雨は止んでいた。

嘘発見器、襲われる

さて、ところ変わって現在地は俺の自宅である。
元々、この一軒家には父・母・俺の計三人の人間が住んでいたのだが、いまは俺が一人で暮らしている。というのも俺が高校に進学すると同時に両親が事故に遭い他界してしまったからだ。
一人暮らしを始めた当初は近所に住んでいた父方の遠い親戚にあたる人物が一緒に暮さないかと誘ってくれたこともあったが、当時の俺は初めて会った人の好意を受け入れることができるほど心に余裕がなかったため、お断りさせていただいたのだ。
このような事情から天原家には俺しかいないはずなのだが、いまはもう一人、イアという名の少女がいる。正確に場所を述べるなら風呂場に。
待て、邪推をするな！　これには事情があるんだ！
本当なら家に着いた後、乾いた服に着替えてもらってすぐに詳しい事情を聞きたいところだったのだが、学校からの家までの間に頻発するくしゃみを聞かされてはそうもいかない。
それで仕方なくイアには冷えた身体を先に温めてもらってから話を聞くことにしたのだが。
「……」
何だかスゲーそわそわする！　さっきから意味もなく居間をうろうろしてるし！
だってそうだろ！？　これまで男しか使ってなかった風呂場に女の子がいるんだぜ！？　平常心？　そんなもん知らねえよ！！
そうして十分程、俺が悶々としていると、ほっこりとしたイアがリビングの扉を開けてやってきた。
イアが着ていた服は全部洗濯機にぶち込んで回しているので、いま彼女が着ているのは俺のジャージだ。俺の服なので小柄なイアには大きすぎるが他のサイズの服があるわけでもないので我慢しても

らうしかない。
「おまたせー。あー、気持ちよかった！」
「そりゃ、よかった。じゃあ、さっぱりしたところで詳しい説明を頼めるか？」
「もちろん」
立ったままのイアに椅子に座るよう促し、俺自身もテーブルを挟んで向かい合わせになるように椅子に座る。
「ねえ、頼人は不幸ってどんなものだと思う？」
俺が椅子に座るや否やイアはこんな質問をしてきた。
「……俺は質問じゃなく説明を頼んだつもりだったんだが？」
「いきなり本題に入ったってきっと理解できないよ。ちゃんと説明するからまずは質問に答えて」
そういう考えだったのか。まあ、イアの顔や言葉に嘘は感じられないし言われた通りにしてみよう。
「不幸ね……。そりゃ色々あるだろ。財布を落としたとか、道に迷ったとか」
両親が事故にあって突然死ぬとか。
「正解。じゃあその中で最大の不幸って何？」
ピッと人差し指を立てながらイアは再び質問する。
「わからない。そんなの人それぞれだろう」
俺にとっての最大の不幸とイアにとっての最大の不幸が違うように。
「最大の不幸っていうのは寿命を迎える前に死ぬことだよ」
「まさか。そんな人間この世に何人もいるぜ？　事故で、病気で、殺人で。寿命を終えるまでに死んでいく人間なんてそれこそ腐るほどいるじゃないか」
「半分正解……かな？　病気はその人の寿命なの。寿命に達した人は病気っていうもっともらしい理由をつけられて死ぬんだよ。もちろん布団の中で寿命を迎える幸せな人もいるんだけどね」
「……つまり『病気』という原因によって『死』という結果が生み

出されるんじゃなく、『死』という結果に『病気』という原因が作られるってことか？」
「そういうこと」
いきなりとんでもないことを教えられたものだ。だがこの話と世界を救うこととどんな関係があるのかが未だにわからない。
「この話と世界を救うのとどう関係があるんだって顔してるね」
言い当てられてしまった。
疑問が顔に出ていたのが照れくさかったが素直に白状しよう。
「ああ。世界がそういう風に動いているっていうなら何も問題はないはずだろう？　一体何が問題なんだ？」
「その疑問に答えるにはまた質問しなくちゃいけないんだけどいいかな？」
さっき俺に突っ込まれたことを気にしているようだ。俺は頷いてイアの質問を待った。
「頼人は神様の仕事って何だと思う？」
「神様ってあのゼウスとかタナトスとかのことか？　それだったら天候を調整したり、死んだ人間をあの世に連れてく――ってとこだろうな」
とりあえず知ってる神様の名前と司るものを挙げる。
「よく知ってるね。でもそれは人が考えた想像上の神様。本物の神様の仕事っていうのは病気以外、つまり事故とか殺人で寿命を迎える前に死んでしまう人を助けることなの」
「この世で一番の不幸になりそうな奴を助けるってことか」
さっきの話とまとめるとこういうことになる。
イアは小さく頷き
「そう。でもそういう人たちを助ける神様が消えちゃったんだよ」
という爆弾発言をさらっと投下してきた。
……俺の聞き間違いだろうか？　いま寿命云々よりとてつもなく大変なことを言わなかったか？
「それでいま世界にはありえないほどの不幸が溢れてるの。つまり

寿命を迎える前に死ぬ人がどんどん増えてるってことなんだけど……」
ちょっと待ってくれ！　そんな簡単に大事なことをさらっと流さないでくれ！
「オイ、神様が何だって？」
「だから消えちゃったの！」
イアが手と足をバタバタさせて訴えてくるがこっちはそれどころではない。
「……ありえねえ！　んな大事な仕事放り出してどっか行きやがったのか！」
思わず椅子から立ち上がり激昂する。
「じゃあ、最近ここら辺で起きてる連続失踪事件もそれが原因じゃないか！　何考えてんだよ神様ってヤツは！？」
「私だって意味わかんないよ！　神様のくせに消えるなんて！」
「いや、もうそんなのは神様なんかじゃねえ！　これから神様と書いてバカと呼ぶぞ、俺は！」
この後、神様（バカ）への罵詈雑言を俺とイアは吐き続け、隣の親父さんに「うるっせーぞ！」と怒鳴られるまで止まらなかった。時間にしておよそ三十分。俺とイアの体力を奪うには充分な時間だった。

「ま、まあ、神様への文句は……置いといて、結局俺は……何をすればいいん…だ？」
何しろ三十分間は喚き続けたから喉がガラガラだ。俺は二人分の冷たい麦茶を用意しながら掠れた声でイアに尋ねる。
「そ、そうだった。えっと、頼人に……してもらいたいのは神様（バカ）が見つかるまで……神様の……仕事を……代わりにしてもらい……たいの」
イアもテーブルに突っ伏してぐったりしている。というかイアまで神様をバカと呼びだしたぞ。

「神様の仕事っていうと事故とか殺人に巻き込まれそうな……人間を助けることか？」
「うん。それもだけど……『禍渦（まがうず）』を壊すことがメインになると思う」
麦茶をちびちび飲むことで俺もイアも微妙に復活してきた。
「『禍渦』？」
「禍（わざわい）の渦って書いて『禍渦』。事故とか殺人っていうのは禍渦の影響を受けて起こる現象なの。イメージ的には水に落とした雫が禍渦、そこから広がる波紋が不幸って感じかな」
イアは指先を麦茶の中につけ、できた雫を再びコップの麦茶に落とし「こんな風にね」と俺を見た。
「言ってしまえば事故や殺人っていう不幸は禍渦に心を侵された人間が起こす二次災害に過ぎないの」
「ということは、不幸を周りにまき散らしてる禍渦さえ壊してしまえば不幸は自然と消滅するってことか？」
「そういうこと。逆にそのまま禍渦を壊さずにいたら次第に禍渦の数が増えて、世界中の生き物が唐突に殺し合いを始める可能性があるってことでもあって、それはすごく悲惨なことで……」
おお、イアの怒りが再燃してきたぞ。コップ！　コップ割れるって！
まあ、それはさておき、ようやくイアの言った『世界を救って』の意味がわかった。確かにそんなどこぞの世紀末よりも物騒な世界は滅びたも同然だ。神様の尻拭いをしなければならないのには正直腹が立つが、かといって放っておくこともできない。
何よりイアともう約束しちゃったしな。嘘はつけない。
さて、やるべきことはわかったが一つ不安がある。
「イア。一つ確認しときたいんだけど」
「どうしたの？」
イアはコップを握り潰さんばかりの怒りをひとまずおさめ、こちらに向き直る。

「禍渦を壊すっていう目的はわかった。だけど恥ずかしい話だが俺にそんなパワーはないぞ？」
体力は程々にあっても筋力はない。
「ああ、それなら安心して」
よかった。イアには何か策があるようだ。
「私も手伝うから」
うん？　何て言った？
「冗談だろ？　そんな細っちい腕でどうやって手伝うんだよ？」
イアの腕はかなり細い。美咲の腕と比べたらもう……。
「それは――こうやってだよ」
イアがそう言った瞬間、彼女の腕に巻きついていた二本のコード、そして残る背中の六本のコードがまるで意思を持ったかのように動き出し、その先端部分が俺に向けられた。
「ちょ、どういうことだよ！」
俺は思わず椅子から立ち上がり慌ててイアから距離を取る。
「いいから動かないで」
どうやらコードは自由に操れるだけでなく長さも自在に調節できるようで、広い所へ逃げようとする俺を上手く牽制してくる。そのため俺は次第に壁の方へ追いつめられていった。
何だお前は？　ドクター・オクト〇スか？
絶体絶命のピンチに陥った蜘蛛男の心境がよくわかったよ。
ちらりとイアを見るとその表情は初めて会ったときと同じく柔らかく微笑んでいる。
「おい、ふざけてるならやめろって。イアがそのコードを操れるのはもうわかったから早くそれをしまってくれ！」
「何言ってるの？　こんなのじゃ禍渦は壊せないよ？」
そう言うと同時に今度は平らだったコードの先端部分からボールペンぐらいの太さを有した巨大な針が飛び出してきた！
俺がもう驚きやら怒りやらで何も言えないでいるとイアはやはり笑顔のまま忠告してくる。

「絶対に動かないでね？」
ああ、そのほうが殺りやすいもんな！
「……わかった、もう好きにしろよ」
俺はコードによって逃げることも叶わず、イアの説得も無理だと感じ、半ば自暴自棄になって目を瞑った。
「じゃあいくよ」
イアの台詞が俺に届くとともにコードの先端についた巨大な針が俺の身体を貫き、首に、腕に、胴に、脚に、鋭い痛みを与えてくる。
「ッグ……！」
声を上げそうになるのを、歯を食いしばって堪える。
……おかしい。身体を貫かれた瞬間確かに痛みはあった。しかしそれは本当にその一瞬だけでもう身体に痛みはない。
俺が事態を把握しようとしていると唐突にイアの笑い声が聞こえてきた。
『頼人ー？　いつまで目を閉じてるの？』
まだ事態がよく飲み込めなかったが、イアに俺を殺す意思はないと感じ恐る恐る目を開ける。
すると、おかしなことに目の前にいるはずのイアの姿はどこにもなかった。目を閉じている間、リビングのドアが開いた音はしなかったし、いくらイアが小柄だといってもこの部屋に人が隠れられるような場所はない。
「イア？　お前一体どこに――」
『ここ、ここ』
再び近くでイアの声が聞こえたことで、ぎょっとして俺は動けなくなる。
しかし、周囲を見渡してもやはりイアの姿はない。
『だから、ここだってばー』
また、近くでイアの声が聞こえる。
いや、違う。
これは近くで声が聞こえるというより頭の中に直接イアの声が響

いているような感じだ。
「イア、もしかしてお前――」
『あっ、やっと気がついた？　そうそう。私は今――』
「『身体の中にいるの』か！？」
親父、お袋、どうやら俺が思ってたよりぶっ飛んだ話になりそうだよ。

「で？　俺の中に入り込んでどうするつもりだ？」
『へへー。頼人にいいものプレゼントしてあげようと思って』
何だかすごく楽しそうだ。
こんな少女にさっきまで自分が怯えていたのがとても恥ずかしい！
もうすごい恥ずかしい！　穴なんかなくても自分で穴を掘って入ってしまいたいぐらい恥ずかしい！
視線を下に向けると身に纏っている服もこれまで着ていた制服ではなくなっていた。いまの俺は何と言うかこう真っ黒な革のコートの下に、同じく黒い服を装着している。しかも、イアが腕に巻きつけていたコードが今度は俺の腕に巻きついている。
嫌な予感がしたので背中を触ってみると予想通りの事態になっているようだ。
腕と同じくコートの下では背中から六本のコードが伸びている。
こんな姿でどうやって学校や近所の大型スーパーサカイヤに行けというのか？　外に出た途端俺のコスプレイヤー人生が幕を開けてしまう。
俺の心の葛藤を知ってか知らずかイアは
『ねえ、ねえ、プレゼントが何か知りたい？　知りたい？』
と耳元、いや頭の中で騒ぐ始末だ。
「あー、わかったから頭の中で騒がないでくれ！　それで何をくれるっていうんだ？」
『うーん、態度がちょっと気に入らないけど許してあげる！　それ

では最初に目を閉じて意識を一点に集中しましょー』
言われたとおりに目を閉じ、それなりに意識を集中させる。もうどうにでもしてくれ。俺、この羞恥心をなんとかしてくれるならなんでもするよ？
『じゃあ次ね。頼人って何か欲しいものってある？』
今度は質問を投げかけられる。何なんだ一体？
「ああ、ある。俺が入れる穴が欲しいよ……」
こう、俺がスポッと入れるような。当分出てこれないようなヤツ。
そう口にした瞬間である。
いきなり俺の視界が闇に覆われ、重力に引き込まれる。
そして次の瞬間、臀部に猛烈な痛みが走った。
「ってぇえ！　何だ！？　何が起こった！？」
『何だって何よー。頼人が欲しいって思ったんでしょ？』
頭の中でイアが怒っている。
「欲しいって思ったって……。じゃ、じゃあこれ穴！？」
信じらんねえ！？
穴にしても深さがおかしいだろ！　上に見える電灯の光がすげー小さいんだけど！？
「イア！　イアさん！　これ元に戻せる？　戻せるよね！？」
すごい勢いで頭の中のイアに問いかける。
頼む。うんと言ってくれ。
『えー、もう戻すの？　戻せることは戻せるけど、いま元に戻したら私たちが生き埋めになっちゃうから先に穴から出た方がいいよ？』
いや、穴から出ろって言われても。
何メートルあるんだ、この穴？　手で登れるようなものじゃないと思うんだが。
「出ろってどうやって出るんだ？　俺はロッククライミングの技術と垂直跳びの世界記録は生憎持ってないぞ」
持ってる資格っていったら漢検、英検の三級だけだ。人に自慢できるようなものは何もない。

『だーいじょうぶ。ほらジャンプ！　ジャーンプ！』
「ジャンプってお前……」
ジャンプしたぐらいじゃ間違いなく届かない。ぱっと見ただけでも俺の身長の三倍はある。大体五メートルといったところか。
だが、他に方法があるわけではないしやってみるとしよう。
足を折り曲げジャンプする態勢に入る。充分に力を溜めて、それを一気に解き放つことで勢いよく跳ぶ！
結論から言おう。
俺は穴の外に出ることができた。
思いっきり天井には突き刺さったが。
「いってぇ！」
『あはは、頼人跳びすぎー』
「『跳びすぎー』じゃねえよ！　何だ、このジャンプ力！？」
「跳ぶ」というより「飛ぶ」って感じだった。
「それも私からのプレゼント。頼人の身体能力を向上させたの。人間ってあんまり強くないし、そのままじゃ禍渦を壊せないでしょ？」
そりゃあどうも！　でもそれは先に言ってほしかった！　先に言ってほしかったな！
何とか天井から身体を抜き、床に着地する。
さて、穴から出ることはできたが、由々しき事態である。直すべき穴が二つになってしまった。
「イア。あの天井の穴も直せるか？」
恐る恐る尋ねてみる。
『うん。問題ないよ。じゃあ、まず床を直そっか。穴に意識を集中させて消えろって念じてみて』
「わかった！」
教わった通り、まずは意識を集中させる。
次に俺は目を閉じて一心不乱に穴が消失するイメージを頭の中に思い描く。
消えろ！　消えろ！　消えろ！　消えろ！　消えろ！

消えろ！　消えろ！　消えろ！　消えろ！　消えろ！　消えろ！　消えろ！　消えろ！　消えろ！　消えろ！

関係ない人が見るとさぞ滑稽だろうがそんなことを気にしている場合ではない！

我が家の一大事なのだ！

『頼人？　もうとっくに穴なくなったよ？』

何秒そうしていたかはわからないがイアの声で目を開けると、そこには我が家の床が完全復活している姿を確認できた。

「おお……」

思わず安堵の声が漏れる。

『次は天井だね。今度は壊れる前の天井をイメージしてみてくれる？』

同様の作業の後、俺が目を開けると天井も復活を遂げた。

「生きた心地がしなかったな、いまのは……」

たとえ俺しかこの家に住んでいなかったとしてもあの穴はマズイ。

毎朝飯を食べる時に嫌でも目に入るからな。朝っぱらから鬱な気分にはなりたくない。

『気に入った？　私のプレゼント』

「気に入った、気に入った。初めにどういうものか言ってくれればもっと気に入ったと思うけどな！」

『だって、そんなの面白くないよ？　プレゼントはサプライズが大事なんだから！』

そうか。じゃあもう充分びっくりしたから次いっていいかな？

「それで、イアのプレゼントは『俺のイメージを現実にする力』と『身体能力の向上』ってことでいいのか？」

いま起こった一連の出来事を踏まえるとそう推測されるのだが……。

『うーん、大体そんな感じかな。あっ、でもそれは――』

それにしてもこの力って科学なのか？

疑問が山のように溢れてくる。

人間と合体するなんてことができるイアは間違いなく人間ではない。
じゃあ、一体何だというのか。
ロボット？　宇宙人？　もしくはそれ以外の何かか？
見た目はコードを除けば完全に人間なんだけどな。
それに何で服が変化したんだ？
そして何で服はこんなにダサイんだ？
後でイアにまとめて聞いてみようか……。
考えを一旦頭の片隅にしまって再び意識をイアの方へ向ける。
『――。最後に一つだけ。禍渦は普通の方法では壊せない。だから同調（リンク）した状態で何か武器を出すとかしないといけないから気をつけてね』
「同調？」
『頼人と私が繋がってる状態のことだよ』
「ああ、そういうことか……」
イアとの話を終えて庭に面したガラス戸を見る。どうやら完全に日が暮れているようだ。
ハハハ。妙な格好をした白髪の俺がバッチリ窓に映ってるじゃないか。また恥ずかしくなってき――。
白髪？　白髪ァ！？
「うぇええええ！　イア、イア！？　なんか俺の髪が爺さんも真っ青なくらい真っ白になってるんだけど！？　どういうこと、コレ！？　ていうか、ああ！　目も金色になってる！」
百歩譲って服だけなら許そう！
だがこれはない！　断じて！！
『ああ、私の力を頼人に貸してあげてるでしょ？　その余波っていうか副作用みたいなもので外見っていうか髪と瞳の色が私にどうしても似ちゃうんだよー』
えへへ、と何やらイアは御満悦の様子。
いやいや、えへへじゃないぜ、お嬢ちゃんよ！？　俺は明日から

こんな髪と目で学校に行かなきゃならないのか？
「勘弁してくれ。これじゃあ外も歩けないって！」
もちろん服装も含めてだが。
『何よー。いいじゃない、おそろいで。パートナーなんだし』
「お前は盛大に勘違いをしてるぞ！　この世でおそろいなんてものが許されるのはデビューしたてのジャ〇ーズグループぐらいなもんなんだよ！」
一回イアには正しい知識というものを教えてやらなくちゃならないな。
いや、そんなことを考えている場合じゃない。何とか元に戻らないかイアに聞かなくては。
「マジで髪と目の色をなんとかできないか？　これじゃあ学校にも行けねえよ」
『もー！　わかった！　わかりました！　そんなにおそろいが嫌ならこれでいいでしょ！』
俺が言葉を言い終わる前にイアがそう怒鳴った。
すると、俺の腕に巻きついていたコードと背中のコードが再び意思を持ったかのように動き、俺の前方に集まりだした。
何が起こっているのかわからず呆けている俺をよそに、それぞれのコードは素早く絡まりあいサナギのような形状を作っていく。
そしてコードの青白い光がひときわ強くなると同時に俺の身体から全てのコードが抜け落ち、先ほどのサナギの中からイアが現れた！
「これで満足？」
サナギの中から現れたイアは腰に手を当てて俺に問いかける。
目に見えて不機嫌そうなイアだが「これで満足？」とはどういうことだ？
よくわからないままもう一度ガラスを見てみると、そこには髪と目の色が元に戻った制服姿の俺の姿があった。
「おお！　元に戻った！」
歓喜する俺をジト目で見つつ頬を膨らませていたイアが口を開く。

「私が同調していなければ影響は受けないんだから元に戻るのは当然でしょ？」
それはよくわかったが、なんか急に俺に対する態度が酷くなってないか？
さっきから俺の方を見もしないし。
そんな風に俺が首を捻っていると、猛獣の唸り声のような音がリビングに盛大に響き渡った。
もちろん、俺の家では猛獣は飼っていない。
なら、いまの轟音は一体何だ？
音の発生源は俺ではない。となると……。
案の定そっぽを向いているイアの耳がこれ以上ないくらいに真っ赤に染まっていた。元々肌の色が白いからか、より一層赤く見える。
と、ここで俺はピーンときた。
成程、それでさっきから機嫌悪かったのか。まったく子どもみたいな奴だな。いや、イアが何歳なのかは知らないけれど。
「イア」
子どもに語りかけるような優しい口調で呼びかける。
「……何？」
やはりさっきのが恥ずかしかったのか、イアの声は一層棘のあるものになっていた。
少しイアの反応が怖いが、今後の彼女の人生のためにも、ここはちゃんと常識を教えておいてあげよう。
「腹が減ってイライラするのはわかるけど、人に当たるのは良くないと思うぞ？」
「違うよっ！」
「おぅっふッ！？」
俺の言葉と同時に振りかえった涙目のイアが凄まじいスピードで繰り出したコードによるビンタに俺はしばらく悶絶することになった。

嘘発見器、降りる

五分間に及ぶ悶絶の後、俺も何となく腹が減ってきたのでひとまず晩飯にすることにした。

決して更なるイアのビンタに怯えたわけではない。断じて。

まあ、兎にも角にも晩飯の準備をするとしよう。

ご飯はいつも通り一人分しか炊いていないので、たまに飯をたかりに来る龍平用に置いてあった冷凍のご飯を使うことにする。

他に何か使えるものがなかったかと冷蔵庫の中を漁って出てきたのは、ネギ、トマト、豚の挽き肉、　ブロッコリー、ショウガ、豆腐、味噌、シイタケ等々。そして冷蔵庫の一番下の部分におわすは大量の缶コーヒーである。

「うわっ！　何でこんなに缶コーヒーがあるの？」

ビンタ娘、もといイアが後ろで声を上げる。俺を殴って少しはすっきりしたのかさっきまでの機嫌の悪さは見られない。

「好きなんだから別にいいだろ？　うまいんだぞー？　風呂上りに冷えた缶コーヒーをこうキューッと……」

「頼人おっさん臭い……」

若干イアが引いているのが悲しい。そういえば龍平もわかってくれなかったな……。

「でも、そんなに良いものなら、何でさっきくれなかったの？」

少し頬を膨らませながらイアが言う。

「あのときはまだ夕方だっただろ？　一日の終わりに冷えたこの缶コーヒーを飲む。これが重要なんだよ」

「うーん、私にはよくわかんないや。じゃあ今日試してみて気に入ったら、これから私も毎日飲んで良い？」

「ああ。それは別に良いけど……」

「やった！　約束だからね！」

そう言ってリビングの方へ消えていくイア。

さて、イアが台所からいなくなったところで、いま俺が思っていることを吐露してもいいだろうか？
イアはここに住むつもりなのか！？
さっきアイツ「これからここでお世話になります」って感じだったじゃん！
確かに俺も自然と晩飯を作ろうとはしていた。けど、俺的には「今日はもう遅いから食べていきなさい」みたいなノリだったんだけど……。
そりゃあ俺は一人暮らしだし、親に関係を怪しまれるとかそんなことはないけど、色々とマズイだろ！？　なんか、ほら、色々！
そもそもイアには自分の家はないのか？
さっきも言ったことだが人の身体の中に入るなんて芸当ができるんだから、イアは人ではないんだろうけど、それでも帰る家か拠点ぐらいあるんじゃないか？
……仕方ない、あまり気乗りはしないが晩飯を食いながら聞き出すとしよう。
ひとまず気持ちに区切りをつけて再び晩飯の準備に取り掛かる。
冷蔵庫に残っている材料から作れるものっていったら麻婆丼ぐらいか。幸い調味料や片栗粉は残っているので何とか二人分ぐらいは作れそうだ。
「じゃ、ちゃっちゃと作るとしますかね」
そう言って熱した鍋に油を引き、軽快な音を立てながら挽き肉を炒め始めた。

結局天原家の本日のメニューは麻婆丼、トマトとブロッコリーのサラダ、そして味噌汁という何とも即席で作った感が否めないものだったが
「おいしー！　頼人は料理が上手なんだねー！」
と思いのほかイアが喜んでくれたので、まあ良しとしよう。

人からおいしいと言われたのは久しぶりなので何だか照れくさい。たまに来る龍平も喜んではくれるがイアが喜んでくれるのとで俺の感動のレベルが異なるのは、やはり俺が男の子だからなのだろう。

それにしてもこんなに賑やかな晩飯を過ごしたのも久しぶりだ。最近龍平は親の監視の目が厳しくなったそうで迂闊に外出することができなくなったらしい。遅くまで外出していると親父さんが町を走り回って捜索を開始するんだと。

龍平曰く、親父さんは何というか過保護過ぎる面があって、さっきの例が示すように必要以上に息子に構いたがる性質を持つんだそうだ。

龍平はそれを嫌がっているようだが、直接会った俺の印象としてはは気さくで良い人であるという印象しかない。お手製の龍平アルバムを見せられたときは引いてしまったが。

俺が懐かしの親父さん暴走事件を思い出していると、やっとこさイアも麻婆丼を食べ終わったようだ。

丁度いい、そろそろ本題に入るとしよう。

「イア、ちょっと話があるんだけどいいか？」

「んー？　どうしたの？」

お腹が一杯になったのか幸せそうな顔をこちらに向ける。

「これからのことについて話したいんだ」

「これから？」

俺を見ながら首をかしげるイア。

「必要な話はもう全部したと思うんだけどなー。何か話し忘れたことってあったっけ？」といった顔をしている。

いや、話してないことあるよ？　そりゃあ、もうたくさん。

しかし、女の子に「ここで俺と一緒に住むの？」とは死んでも真顔では聞けない。そんなことを平然とやってのけるのは石田〇一か、ジロ〇ラモぐらいなものだろう。

なので時間はかかるだろうが遠まわしに話を進めていくことにする。

「そういえば、俺って全然イアのこと知らないよなー。イアってどこに住んでるんだろうなー」
くぅっ！　棒読みなのはわかってるさ！
仕方ないだろう？　小学校、中学校と文化祭で木の役しか演じてこなかったんだから！
とにかく、ここで大事なのはイアの答えだ。
こういう聞き方をすれば自分の活動拠点の場所を吐かざるを得ないだろう。
そうして場所を聞きだしたらお前を即☆強制帰宅させてくれるわ！
混乱し過ぎて俺自身もよくわからないテンションになっていると、イアは案外あっさりと自分の住む場所を教えてくれた。
「ここ」
俺の家だった。
「……いつからお前は俺の家族になったんだ？」
そう問うとイアは
「家族にはなってないけどパートナーにはなったでしょ？　それに私、ここ以外に住む所なんてないし」
と当然のことのように言う。
「ちょっと待て。じゃあ俺に会う前はどうしてたっていうんだよ？」
「どうしてたって言われても頼人と会う前はずっと屋上にいたけど？　あ！　でも頼人の下駄箱に手紙を入れなくちゃいけなかったから、少しの間玄関にもいたよ」
どうやら話が噛み合っていないようだ。
「待て待て、そうじゃなくて！　俺と会う前はどこに住んでたんだって聞いてるんだよ！　神様の御殿にでも住んでたんじゃないのか！？」
「えー、神様の家なんて知らないよー？　それにどこかに住むなんてこと自体したことないし。だって私――」
そこでイアは一旦言葉を切った。
そして、再び口を開き衝撃の告白をしてきやがった。

「生まれてからまだ一日も経ってないんだよ？」
イアの言ったことが本当のことだといつものように瞬時に理解した俺があまりの驚きに何も言えないでいるとイアは続けてこんな提案をしてきた。
「私が生まれたところなら案内できるけど。ここから近いし行ってみる？」
何とも唐突な提案だったが、俺は好奇心を抑えることができなかった。
いや、抑えなかったと言った方が正しいか。
だって俺が失望してきたこの世界でこんなにもおかしく、魅力的なことが起こっているのだ。
喉が渇けば人は誰でも水に手を伸ばす。
それと同じことだ。
「案内してくれ」
気づいたときには俺はイアにそう答えていた。

というわけで俺は食後の後片付けを後回しにして、イアの生まれた場所に案内してもらうことになった。
乾燥機に入れておいたイアの服は乾いていたので、既に着替えてもらっている。
家の中ならともかく女の子をあんなジャージでウロウロさせるわけにはいかないからな。
そうして準備を済ませ、いまはイアの生まれた場所に案内してもらっているところなのだが……。
「これ知ってる！　踏切ってモノでしょ？　あ、電車！　頼人、電車だよ！」
こんな調子で俺の数歩前を行く案内人は電柱や信号など様々なものに興味を示し、あっちへフラフラ、こっちへフラフラしているので、俺たちは果たしてちゃんと目的地に向かっているのかと心配に

なる。
　また、イアのコードは淡く光を放っているので通行人の注意を引いていないかも気になって仕方がない。もし俺がイアと一緒に歩いているこの場面を同じクラスの人間に見られた場合、明日学校での追及は免れないだろう。
　そう考え、イアとの距離を少し広げようとしたところで自分が見覚えのある道を通っていることに気がついた。
「……この道、俺の通学路じゃないか」
　このまま真っ直ぐ行けば五分と経たずに豊泉高校に着く。
　これは余談だが豊泉高校の周りにはまだ自然が多く残っており、校舎の裏側には双子山と呼ばれる大きな山がある。そこは普段子どもの遊び場になっているのだが、最近は失踪事件が相次いで発生しているため、このような遅い時間帯はもちろん、明るい時間帯においても子どもの姿を見ることがなくなった。子どもたちは外で遊べなくなって不満だろうが、事件を未然に防ぐためなので仕方がないだろう。
　そして俺も事件に巻き込まれるのは御免蒙りたいのでイアに声をかけることにした。
「イア、まだかかるのか？　お前は知らないだろうけど、最近この辺りは物騒なんだ。できればあんまり長居しないほうが良い」
「ああ、やっぱり？　禍渦の気配がするから、もしかしたらそうかなー、とは思ってたんだけど」
「気配がするって……。ま、まさか近くに禍渦があるのか？」
　慌てて周囲を見回す。これまで進んできた道とこれから進むであろう道にあるのは暗闇だけだ。何も嫌な気配は感じられない。
　そんな俺を安心させるかのようにイアが説明してくれた。
「大丈夫だよ、頼人。気配がするっていっても残り香みたいなものしか感じないから。禍渦そのものに気配はもっと酷いの。こう……、バーッって感じ！」
　イアは両手を広げてその凄さを伝えようとしている。心遣いには

感謝するが、残念ながら全然伝わらない。
しかし、いいことを聞いた。
「気配がわかるってことは、つまりこうしてイアと歩いているだけで禍渦がどこにあるかわかるってことだよな？」
だとすれば便利だ。ある程度の距離まで近づいてしまえば簡単に位置がわかるということなんだから。
「そうだけど、あんまり期待し過ぎないでね。私だって大まかな位置しかわからないんだから……。あ、着いたよ、頼人」
イアがある建物を指さす。
「着いたってここは……」
イアが指さしていたのは豊泉高校そのものだった。通学路を通って行くので高校方面に目的地があるのだということはわかっていたが、まさか高校そのものだとは思いもしなかった。
自分の通っている高校で少女が誕生するとは誰も思うまい。
俺が唖然としていると、イアはさも当然のように校門を登りだす。
おい！　スカートなんだからもっと慎重に行動してくれ！　こっちは一応健全な高校二年生なんだぞ！
俺が目を逸らしている隙に、イアはガシャガシャと音をたてて鉄製の門を突破していく。
「頼人―、早く早くー。あんまりここに長居したくないんでしょ？」
そうだ！　早く登らなくてはならない！
つまり、上を見てしまってもそれは不可抗力だ！
そう自分を納得させ、即座に校門を仰ぎ見る。しかし、そこには綺麗な月があるだけだった。
「あれ？」
どこにもイアの姿は見当たらない。そして俺が首を捻ると同時に、イアの声が聞こえてきた。
「ねえ、まだ登らないの？」
声のした方を見ると、既に門を乗り越え、地面に降り立ったイアが俺を見つめている。

「……すぐに登ります」
目を逸らしたことに対する後悔の念を押し殺しつつ、俺も素早く門を乗り越える。
夜の学校には初めて来るが、その校舎はやはりどことなく不気味な雰囲気を醸し出していた。昼間は多くの学生で賑わっている学校も無人になってしまえば寂しいものだ。
ちなみに俺の通う豊泉高校は校門から入って左手にはグラウンドが広がっており、右手には手前に校舎が三棟、奥に体育館が建てられている。
ウチの高校は特にスポーツに力を入れているわけではないのだが、グラウンドも体育館もそれなりの広さを誇る。そのため去年の体育祭では異常な盛り上がりをみせたのだがそれは関係ないので思い出すのはやめておこう。
話が脱線したが、この高校にはそれらの建物以外にもう一つ特徴的なものがある。
それはグラウンドの隅にある小さな古井戸のことだ。
井戸そのものはどこにでもあるような煉瓦造りの丸い口をしたもので、井戸の上には屋根も設置されている。しかし、水を汲み上げるための桶や滑車が見当たらないので、どうやら現在も使用しているのではなく壊す費用が勿体ないので放置されているだけのようだ。
いま俺が何故この古井戸の話をしたかというと、校門を乗り越えた俺とイアが向かった先はその古井戸だったからだ。
そしてイアは目的地に着くや否や、井戸の上に置いてある落下防止用の蓋としての役割を与えられているであろう石板をずらし始めた。見ると既に半分ほどその石板はずらされている。
「頼人も……見てないで……手伝ってよ」
イアが少し怒ったような口調で言う。
「な、何してるんだよ？」
「私が生まれたところに……案内しようとしてるんだけど？　頼人が見たいって……言ったんでしょ？」

そう言って再び石板をずらし続ける。
そのままボーッと突っ立っているわけにもいかないので、慌てて俺もイアを手伝うことにする。
まったく！　俺は！　こういう力仕事は！　苦手だってのに！
そう思いながらもイアと協力して石板をずらす作業に没頭する。
思ったよりも石板は重かったが、最初から半分ずらされていたこともあって意外と簡単にどかすことができた。
そうして露わになった井戸の口を覗き込むが、月明り程度の光では井戸の底まで見通すことはできない。試しにその辺にあった石を井戸の中に投げ込んでみると、音が返ってくるまでかなりの時間を要した。……どうやらこの井戸相当深いらしい。
「頼人、頼人」
俺が井戸の底を覗き込んでいると、不意にイアが俺を呼ぶので振り返る。
それと同時に腹部に何やら温かい感触。視線を下に向けると何かがくっついていた。
というかイアだった。
「お、おま！　何してんだ！」
「何って頼人を抱きしめてるんだけど？　そんなことより喋ってると舌噛むよー？」
「へ！？　舌！？　うぉぉぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおい！？」
抱きつかれ、動揺していた俺がその言葉の意味を問おうとしたその瞬間、俺の身体は空中に浮かんでいた。
慌てて周りを確認するとイアの背中から伸びているコードが井戸の屋根を支えている四本の柱に絡みついている。どうやらコードの力だけで俺とイアは空中に持ち上げられているらしい。
「ちょっとじっとしててね。これ結構疲れるんだから」
そう言ってイアは宙に浮かせた自分と俺を井戸の中に慎重に下ろしていく。

……どうやら大人しく従った方が良さそうだ。そう判断して速まる鼓動を必死に抑えながら俺はイアと一緒に井戸の底へと下りていった。

嘘発見器、知る

井戸を下り始めてから大分時間が経ったが俺とイアはまだ底に着かずにいた。
一体この井戸どこまで続いてるんだ？
さっき上を見上げたが、夜ということもあってか井戸の輪郭はほとんど見えなくなっていた。
井戸の標準的な深さは知らないからよくわからないが、それにしても深い。とりあえず俺が自分の家に作ってしまった穴とは比較にならないくらい深いことは間違いない。
いま俺が自分の周りの状況を把握できているのはイアのコードが常に青白い光を発しているおかげだ。こんなところに入るとわかっていれば懐中電灯の一つや二つ持ってきたんだが。
「イア、まだ底には着かないのか？」
集中している様子だったので話しかけないようにしていたが、このままでは息が詰まりそうだ。少しでもいいから話をしたい。
「うーん、もう少し、かな？　二人分の重さを支えてるから時間はかかってるけど。急にどうしたの？」
もしかしたら無視されるかもと思っていたわりには、随分気楽そうな返事が返ってきた。どうやら会話が特に邪魔になるというわけではなさそうだ。
「いや、一人で二人分の体重をこんな長い時間支えてるから大丈夫かなと思ってさ」
「ふふ、心配してくれたの？　ありがと」
そうイアが柔らかく微笑んだとき、足に何かが当たった。
「お？」
「底に着いたみたいだね。ほら！　もう少しだって言ったでしょ？」
イアの抱擁から解放されて自分の足で立った瞬間、確かに底に着いたことを実感する。

井戸の底には一見したところ何もなく、本当にイアはこんなところで生まれたのかといぶかしんでいると、伸ばしたコードを回収し終えたイアが今度は俺の腕を引っ張りだした。
「ほら。こっちこっち」
イアが俺を引っ張った先には、ぱっと見たところ他の壁と変わらない岩肌にしか見えなかったが、よく見てみると下の方に人一人通り抜けられそうな横穴がぽっかりと開いていた。
「この先が私の生まれたところだよ。さ、行こー」
さっそく四つん這いになって横穴に入ろうとしたイアを制止する。
「待て。俺が先に行く。お前は後から来てくれ」
「え、何で？　別に私が先でもいいんじゃないの？」
「いや、駄目だ。これだけは譲れない」
よくわからないといった表情をしていたイアだったが「頼人がそうしたいんだったら」と譲ってくれた。
もちろん俺もこんな不気味なところを、まして照らすものがコードの灯りだけという悪条件の下、先陣を切りたいわけじゃない。むしろ是非しんがりを務めたいぐらいだ。
それなら何故と思うかもしれない。だが君たちは大事なことを忘れているのだ。
それは何か。
それはイアがスカートをはいているということだ！
敢えてもう一度言おう！　スカートであると！
校門での行動からもわかる通りイアには恥じらいというものが皆無なのだ！
本来ならすぐにでも羞恥心というものを叩きこみたいところだが、いまはイアの生まれた場所を見に行くのが先だ。とりあえず横穴に潜り込むとしよう。
横穴を形成している壁はゴツゴツとしていたが、手や膝をつく地面だけはツルツルとした肌触りをしており、まるで研磨された石の表面のような感じがした。

それにしてもこの横穴どれくらいあるんだろう……。結構この態勢を続けるのは辛いんだが。
横穴を進みながらそんな嫌な考えに浸っていると、意外にもすぐに出口にたどり着いた。
身体を起こし周囲を確認する。
辿り着いた部屋には申し訳程度の照明が付いており、ぼんやりとだが部屋の様子を観察することができた。
大きさは大体学校の教室一つ分といったところか。部屋の中央には大人一人が余裕で入れるような大きなカプセルが置いてあり、そのカプセルの内部に無数のケーブルがぶら下がっていた。
その他には無骨な形状をした椅子がカプセルの横に置いてあるくらいで特に注目すべき物はない。
「こりゃ、ここに住めっていうのは無理だな」
イアが俺の家に住む以外の選択肢が消えてしまったことに落胆しているとイアが遅れて到着した。
「ね？　別に面白いものなんてないでしょ？」
と立ち上がりながらイアが俺に同意を求めてきたが、とんでもない。少なくともここに来た意義はあった。
「イアはあの中にいたのか？」
カプセルを指さして尋ねる。
「うん。あそこから出てきたのは今日の朝方だったかな」
「その大きさの姿でか？」
「うん。服は着てなかったからそこにあったのを着たんだけどね」
目でそばにあった椅子を見ながら言う。
これも本当。やはりイアの言葉に偽りはない。
では残る疑問はあと二つ。
生まれて十数時間のイアの身体が見た目十四、五歳に見えるのはもはや問題にはしない。イアが生まれたときからこの姿だったなら、恐らくあのカプセルは人口子宮のようなものなのだろう。大型の草食動物は胎児を充分に成長させてから出産させるが、イアの場合そ

れを更に進化させた方法で生まれたと考えられる。
だが。
「イア」
「どうしたの？」
「生まれたばかりのお前にどうしてここまで知識があるのか教えてくれないか？」
そう。如何に身体を成長させたとしても普通知識までは備わらない。にも関わらずイアはある程度の常識を有していたし、それを元にして論理的に考えることもできている。
家でイアの生まれた時間を聞いてから様々な可能性を考えているがこのことに関してはいくら考えても答えが出ない。
「う～ん……、頼人、あそこにあるケーブルが見える？」
俺が答えを待っているとイアは唐突にカプセルの方を指さして質問をしてきた。
「ケーブル？　ああ、あのカプセルの中に見えてるヤツか」
それならこの部屋に入ってすぐに気がついたが、あのケーブルがどうしたというのだろう？
カプセルに近づいてよく見てみるとそれはイアのコードと良く似ていた。だが一つだけ異なった点がある。
それはケーブルから青白い光が失われていることだ。
「このケーブルがどうかしたのか？」
「それが私の知識の秘密なの。私がカプセルに入っている間はそのケーブルを介して私にこの世界の情報が流れ込んできてたってわけ」
何だ、そりゃあ……。アイデアも技術もぶっ飛んでやがる。明らかにこの時代の技術を超越した技術に対し、驚きを通り越して呆れにも近い感情を抱いていたが、そこである考えが俺の脳裏に浮かんだ。
このカプセルを作ったのが神様なんだとしたら。
「その情報から神様のこととかもある程度はわかったりしないのか？」

俺がそう言うとイアは首を左右に振った。
「残念だけど私がそこから教えられたのは、この世界の一般的な知識、頼人に話した世界の秘密、後は自分が神様に作られた対禍渦用の人型端末っていう道具だということだけだよ」
「そう、か……、じゃあイア、最後にもう一つ聞いていいか？」
「うん」
「どうして俺を選んだんだ？」
これは俺が最も疑問に思っていたことだったが、これまでドタバタしていて聞く機会を完全に失っていた。
パートナーが必要だといっても、それが俺でなくてはならない理由はない。にも関わらずイアは俺の下駄箱にメッセージを入れるという古典的手段を用いてまで俺に固執したということは何か理由があるのだろう。
「私は誰とでも同調できるわけじゃないの。頼人を選んだのは私が生まれたこの井戸の近くで一番適合率の高い人間が頼人だったからだよ。ケーブルを通して頼人のことも知ってたし」
つまり全てはあのカプセルを作った神様に起因するってことか。
「オッケ、わかった。あー、その……悪かったな、根掘り葉掘り聞いちゃって」
俺がそう言うと、イアは両手を目の前で振りながら否定した。
「ううん！　頼人は全然悪くないよ！？　パートナーを組む相手のことだもん、知りたくもなるよ」
「それでもお前は良い気分じゃなかったろ？　なら謝らないといけない。理屈じゃなくて俺の気持ちの問題だ」
俺がそう言ってもイアは納得していないようだ。
しばらく、うーんと唸って難しい顔をしていたかと思うと今度はぱっと顔を輝かせてこんな提案をしてきた。
「じゃあ、今度は頼人のことも教えてね。私、顔と名前しか教えてもらってないから。それならおあいこでしょ？」
「それでイアの気が済むんならそれでいいけど」

「やった！　約束だからね？」
コーヒーの件といい約束がどんどん増えていくな。その度にこんな笑顔を見られるんなら安いものだが。
「ああ、その代わり話をするのは俺の家に帰ってからな」
「へっ？　私も一緒に行っていいの？」
「別にここに住みたいんならそれでも構わないぞ？　夏場は涼しそうだ」
俺は住みたいとは思わないけど。
「それにイアの居場所を聞いたら俺の家だって自分で言ってたじゃないか」
「でも、家ですっごい嫌そうな顔してたし……」
「その嫌な顔してた家主がいいって言ったんだから何を遠慮する必要があるんだよ？」
そう言うと今日一番だと思われる笑顔で
「ありがと！」
と言って抱きついてきた。
照れくさくてぶっきらぼうな言い方になってしまったが、俺はいま心底イアを手伝ってやりたいと思ってる。
自分でも自分ことを殆ど知らないくせに、包み隠さず、嘘偽りなく話してくれたこの少女に。
だから、これから始まる、いつまで続くかわからないこの奇妙な生活を俺は受け入れようと思う。
俺は屋上で誓った時よりも強くそう思った。

そしてイアの生まれた場所である井戸からの帰り道。来たときと同じように井戸を登り（もう一度イアに抱きつかれるのも恥ずかしかったので、同調して登ればいいんじゃないかと提案したら何故か凄く不満そうな顔をされた）、石板で蓋をして校門まで移動する。
今度は俺が先に校門を乗り越え、学校の前の道路に待機。そこで

ふと校門のすぐ側にある双子山へと続く道に目を向けると地面に何か落ちているのに気がついた。
「どうしたの？」
いつの間にか校門を乗り越えて来ていたイアがそう声をかけてくる。
「いや、あそこに何か落ちてないかと思って」
そう言ってイアと一緒に何かが落ちている場所に近づく。
腰を屈めてそれを拾い上げてみると、それが豊泉高校の学生証だということがわかった。一体誰のだと思って名前を確認すると何とそれは美咲のものだった。
美咲のことだから再放送のドラマを見ようと急いで帰ろうとして何かに躓き、カバンの中身をぶちまけたんだろう。慌てて落ちていた物を拾ったがこの学生証には気づかず、そのまま帰宅したんだな。きっと。
その光景がありありと目に浮かぶ。思わず顔がにやけてしまっていたようで、側にいたイアが心配そうな顔をしている。
「大丈夫？　頭打った？」
「打ってねーよ！？　ずっと見てただろ！？」
にやけていた俺は相当気持ち悪かったのだろうけど、こういう心配をされると直接気持ち悪いと言われるよりキツイものがあるな……。
「これ、俺の友達の落し物みたいなんだよ」
「ふーん。それでどうするの？　いまから届けに行く？」
「いや、もう時間も遅いし明日にする。どうせ学校で会うしな」
それにイアと一緒に居るところを見られて学校で変な噂が広まるのも困る。美咲はそういう噂を流したりはしないだろうが、あいつの場合ポロッと喋ってしまう可能性が非常に高い。
そうしてズボンのポケットに美咲の学生証をしまった瞬間。
「へ？」
何が起こったのか分からなかったが。

俺の身体が宙に浮いて反転し。
酷い痛みが頭を襲い。
俺の意識は闇の中へと沈んでいった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5752z/

白鷺と嘘発見器

2012年1月1日03時10分発行